京都暮らしの体験を綴った

青木（あお き）悠（はるか）さん



人間・環境学研究科修士１回生。2003年、大阪府生まれ。2022年、京都大学総合人間学部に入学。シェイクスピアを研究。研究者目指して邁進中！

写真提供：青木悠さん

はみだしすてーじ

インフル罹ったけど『チ。』も『まどマギ』も見れたのでOKです！　レポートは書けていません　（文・１　うぐいす）
⇒完全に自分のために使える時間って、ないですもんね～　（来年はかかりませぬよう；編）

2025年10月に、『京大生、出町にダイブ！　（河出書房新社）』を出版。

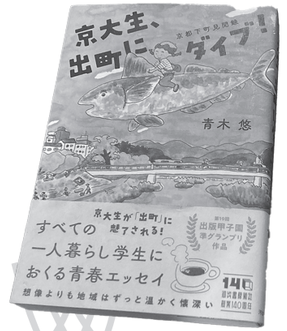
入学まもなく桝形商店街に足を踏み入れ、そこから出町や桝形商店街の世界に惹き込まれていく生活を綴ったエッセイ。カフェ「出町ぴぎん」のママとの出会い、「ぴぎん」で出会う人たち、人間模様。京大から近いようで遠いような、不思議な街のお話です。ルネでも好評発売中！　（ルネには10冊ほどサイン本が紛れているらしい!?）　今回は青木さんに本のことについてお聞きしました。

（聞き手：小海）

――小さい頃から本は読んでいましたか？

めっちゃ読んでいたと思います。他の人より読んでいたし、文学みたいなジャンルに手を出すのも早かったと思います。宝塚にめっちゃハマった時期があって、それから脚本家になろうと思って。中学・高校では脚本書いて、文化祭で劇を上演もしていました。バレエ教室にも通っていて、上級生が出し物やるから、じゃあお話を……みたいな。最初はそんな感じでしたね。そのころから結構まとまった量の文章を書いていたと思います。

研究者になるつもりでいるので、出町のことをもっと知りたいと思ったとき、本を調べるのが最初のステップだったんですけど、調べてみてもテキストとして歴史があまり残っていなかったんです。アーカイブに興味があったので、生活の記録としての側面を含めて本がいいかな、と。ただ書き溜めていたとかではなくて、本が出るって決まってから一気に思い出して書いたので、本当はもっと細々とした何かがあるはずなんですが、今でも覚えているようなことだけが書かれています。



――アーカイブを考え始めたのはいつでしたか？

２回生のときです。けれど本にしたいって動機は最初薄くて。２回生の後期を前にして「なんか暇になるかもしれんな、ちょっと新しいことやろうかな」と思ったとき、出版甲子園っていうコンペのことを思い出したんですよ。出町でいろんな面白い人と逢ったし、面白いこともあったし、それを書けば受かるんじゃね？　って応募しました。正直アーカイブ云々みたいなのは実際出版が決まってから気持ちとしてついてきたんですけども。でも綺麗事ではなく、私は本気で出町は長く賑わう街であって欲しいし、今の姿を歴史史料として残しておきたいっていうのは、本気の本気で思っています。

――出版まではどのような流れで進むのでしょうか？

２回生の６月頃にまず出版甲子園の１次応募をして、２次、３次。最終決まったのが11月末くらい。編集者さんからオファーを何件かいただいて、いろいろ打ち合わせして、この出版社でいきましょうってなったのが３回生の４月くらい。本決定があって、４月から７月末の間に全部書いて、９月から留学に行ったって感じですね。話は戻りますが、出町をアカデミックに分析するのは私の専門じゃないし、それをやる気力もなかった。かといって文学は違うな、と。編集者さんに「あなたはフィクションも書ける、だからフィクションを織り交ぜるとか、小説にしたら？」と言われて、それはしませんって言ったんです。リアルな人物がいるのに、失礼じゃないかって思って。

――本に書かれているような出会いが繋がるのは不思議というか、できすぎているって思うときがあります。

それは読んだ人からすごい言われますね。うまくいきすぎているとか、キラキラしすぎているとか。出版したいってい

はみだしすてーじ

電車の終点は、大体繁華街だけど、バスの終点は何もなくて、良いですね。　（農・２　jurinko）
⇒何でもないからこそのワクワク感がありますね！　（さて、本当に“何もない”でしょうか？；編）

うのは気持ちがあったとしても、そこまでの積み重ねでいろんなことがなかったら書くこともないわけだから、なんていうんだろうな、そこの生活が積み上がってて、それにガッツが合わさった結果だというのは間違いないです。出会いに関してはほんとに、ラッキーでしたね。
最近インタビューとか、トークセッションがあるんですけど、他の大人がインタビュー受けている時に「このきっかけはなんだったんですか？」と聞かれて「運よく」とか「流れるままに」とか言う人が結構多いなと思って。それは実際そうなんだろうけど、私は「その時なんでそう思ってそこへ行ったの？」って思うことが多くて。その観点で言うと、「びぎん」（編集注：カフェ「出町びぎん」）に出会ったのはマジでデカかったんですけど、気になったらとりあえず入るとか、お年寄りしかいないイベントに誘われてもとりあえず行くとか大事です。１、２回生の頃はいろんなお誘いにイエスと言っていて、ここまで出会いが広がった理由の一つにあると思いますね。話しかけられたらちゃんと聞く。２、３回目の同じ話でもうんうん聞く。

うち、母が経営者なんですけど、経営者やアスリートのハウツー本みたいなのを読んでいても、ラックが大事ってよく見ます。ただそのラックは、意図的に作り出せることもある。

――「びぎん」に通いつつ、バイトもやがて桝形商店街で始め、商店街のSNS運営もされたと書かれていました。お忙しくなかったですか？

１回生のときは自炊ができなさすぎたので、起きてご飯がないときは一旦「びぎん」に行って１日スタートです。なので週４、５回とかで行っていた気がします。バイトは週１、２回で、桝形の中をてくてく歩くのは週４、５回ほどありました。SNSは通りすがりにいいシーンがあれば写真を撮るくらいでした。

――地域と繋がるって、どのような感覚ですか？

私は外から来た人間だったから、真ん中に核がある共同体に端っこから突入していったイメージで、京都っていうのはそうしないと入れないのかなとも思う。そもそもここは本当の京都ではないと言う人も多いから、出町だからギリ受け入れてもらえたのかもしれないです。西陣とか、本当にその中で生まれないと見えない世界もあるのかなって。
『出町にダイブ！』ってタイトルにしたのは、待っている地域側が大きく手を広げていって、そこへ私が手を重ねて伸ばして飛び込んでいく、そのイメージでした。みんなずっとここにいる人たちだから、土地とアイデンティティが結構一体化しているような感じがありましたね。地域に入るなら、ある程度突っ込まないとお互い受け身になってお近づきになれない。

――飛び込む姿勢があっても誰かの導きがなければ難しいこともあるのではないでしょうか？

エッセイの中によく登場しますけど、「出町びぎん」のママがいろんな人に「この子京大の学生さんでね、最近よく来てくれるのよ」って言ってくれて。たくさんの人に会って最初はドキドキしたけど、「新キャラ登場や！」みたいな気持ちで結構楽しんでましたね。

――エッセイ中、青木さんを受け止めた地域の縁を「透明な網」と表現されたのが印象に残りました。

そこは一番書きたかったところですね。これは森見登美彦のようなフィクションではなくて、リアルな生活から生まれたものだから、地域にお世話になったという意味でも地域のコミュニティは一番に書きたかった。街には京都の文化だとか、複雑に絡まっていて、それを表現したという感じです。
私の場合は出町という街の存続に生活はかかってないわけです。けれど商店街がなくなったら本当に困る人はいますよね。私はそこで商売している人や、住んでいる人のレベルで街にコミットすることはもちろんできなくて、その人たちが築いたものの上に立っているだけ、という感覚はあるんです。一方で自分が出町の歴史のちょっぴりにすらなっていないかと言われると、そうでもない。なんか、街の一部になるっていうより新たなちっちゃい網を重ねるみたいなイメージで。

――エッセイ終盤では留学から帰国後、地域への接し方は変化したと書かれています。

今はエッセイに書いた出来事を経験している時とは見え方も変わりました。１、２回生の頃は地域の関わりの中で知らないことだらけだった。出町が真ん中に核がある共同体だと例えましたが、その核が今は見えている。そこへ行くには今までと比にならない労力がいるけど、距離的には近いと分かっています。自分が最初にいたこの共同体の端っこと今いる場所との距離に比べてね。部外者的な立場から言うと、掘れるとこまで掘ったとは思います。それはすごく街に対しては傲慢な態度だっていうのは理解していますが。

――京都に住むって、一体どういうことなんでしょうね。

どの土地にも人が生活した堆積物の上に自分の生活があるっていう感覚がきっとあるはずなんですけど、京都に関してはその地層が分厚い。かつ私は出町が個人的に響くところが大きかった。昔、出町から北の人は全員ここへ買い物に来ていた、という話をよく聞くので、人の出入りが多く、来るもの拒まずという風土があるのかなとは思ったりして。ただ、商いがおこなわれて、祭りなど文化があって、しかもそれが生活の中にあるっていうので、出町で暮らすとそういう部分に意識的にならざるを得ないと感じます。

――出町って京都の分厚い土壌の、露頭のような場所なんですかね。明らかに顔見知り同士の店の人とお客が喋っている風景が自然に見られるし。

そうとも言えるかも？　開かれている空間がずっとボコボコ並んでるのが商店街だから、本当は外から見えない空間での会話が店っていう空間で可視化されてる。人の繋がりが見えやすくなっているっていうのは確かにあるかもしれないですね。

――ありがとうございました。

出町をもっと知りたい人へ……

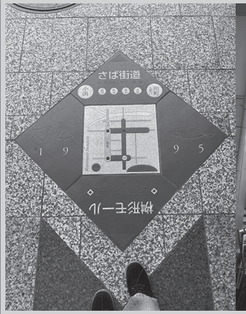
青木さんが執筆を思い立った時にはなかった、出町に関する学術寄りの書籍を紹介します。



〇京都出町のエスノグラフィ
―ミセノマの商世界―
有馬恵子　著
青土社　2025年７月
文化人類学、民俗学、社会学をクロスした分析。



〇自分の街を作るには
和田蕗　著
余波舎　2026年２月
都市史・建築史の観点から分析。著者は学生時代からまちづくりに関わる。





いざ、桝形商店街へ！

四条河原町などと違い、食料品や日用品店が並ぶ生活商店街です。普段のお買い物スポットとして純粋におすすめ！　まだ行ったことがないという方も、行ったことがある方も、『京大生、出町にダイブ！』を片手に足を踏み入れてみては？



はみだしすてーじ

2026やりたいことリスト100を書きました
⇒初心忘れずに、お互いやっていきましょうね
（エ・１　かべちゃん）

（３回生になると体力減るから気をつけろ！；編）

はみだしすてーじ

大学生協には「近隣住民」の枠で、学生でなくても加入できるのです。
⇒これはありがたい教え
（他　神父）

（卒業してからも入る……のか；編）